市立ひらかた病院 糖尿病・内分泌内科 / 糖尿病センター に所属するすべての医師は、高槻市にある大阪医科薬科大学内科学Ⅰ教室に所属しています。大阪医科薬科大学内科学Ⅰ教室では年１回、紫水会総会という同門会を開催しています。大阪医科薬科大学病院とその関連病院で働く内科医師が一堂に会し、特別講演で最新の知見を得るとともに、懇親会で交流を深める会です。

教授・助教授・医局長、そして関連病院の重鎮達が一斉に顔を揃える、ものすごく気の重い、いえいえ!!、楽しみな会です（笑)。紫水会総会では、前年の１年間で受理された論文（原著論文、症例報告論文いずれも含む）の中から優秀な論文が選ばれ「紫水会臨床報告奨励賞」が授与されます。この賞に市立ひらかた病院 糖尿病・内分泌内科の症例報告論文が３年続けて選ばれたんです。

３年連続ってすごくないですか!?

2022 年（第 41 回）紫水会臨床報告奨励賞

「グルカゴン・アルギニン負荷試験で膵内分泌を評価した Ketosis-prone diabetes の１例」　糖尿病　2022 年 65 巻 6 号 p. 319-326

https://www.jstage.jst.go.jp/article/tonyobyo/65/6/65_319/_pdf/-char/ja

2023 年（第 42 回）紫水会臨床報告奨励賞

「SGLT2 阻害薬内服中，十二指腸炎を契機に正常血糖 DKA を発症した未治療バセドウ病合併 SPIDDM 例」　糖尿病　2023 年 66 巻 3 号 p. 208-214

https://www.jstage.jst.go.jp/article/tonyobyo/66/3/66_208/_pdf/-char/ja

2024 年（第 43 回）紫水会臨床報告奨励賞

“A Case of Type 2 Diabetes Mellitus with Lung Cancer Suffered from Euglycemic Diabetic Ketosis Accompanied by Adrenal Insufficiency after Immune Checkpoint Inhibitors”　Case Rep Endocrinol. 2024; 2024: 9982174.

https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/38414717/

（糖尿病センターだより 1 号も是非ご覧ください。）

　その昔、大阪医科薬科大学内科学 I 教室の花房俊昭先生が教授でいらっしゃった頃、先生が良く口にされていた言葉があります。「臨床医たるもの臨床研究をおろそかにしてはいけない。臨床研究は臨床医としての成長を助ける。」……当時大学院生だった主任部長、全く意味が分かりませんでした（すみません）。だって研究は研究、日常診療は日常診療。研究とは頭を捻って難しい論文をたくさん読んで、うんうん言いながら論文原稿を書くもの（そして指導

医に徹底的に直されて凹むもの)。日常診療は診察室や病棟で、生身の患者さんを相手にして、刻々と変わる病状に臨機応変に対応するもの。臨床研究と日常診療は、全然違うものだと思っていました。

主任部長も年齢を重ね経験を積み、糖尿病治療に関しては、誰にも負けない（負けたくない）気持ちがあります。ほとんどの糖尿病患者さんは、1 回の診察で、診断～治療～今後の見通しまで、ある程度は目途を付けることができます。しかしごく稀に、いつものやり方では説明のつかない不思議な患者さん、いつもの治療では上手くいかない不可解な患者さんに巡り合うことがあります。そんな時、過去に同じような事例がないかどうか丹念に文献を調べ、なければ希少症例として（患者さんの同意を得たうえで）学会発表そして論文執筆するという仕事を、臨床医としての期間と同じ長さで続けてきました。文献検索、学会発表そして論文執筆の過程で多くの論文を読み、試行錯誤して臨床経過を分かり易くまとめ、終始一貫した明確な論旨で症例の考察を展開し、簡潔な言葉で発表する。その過程の中で、つくづく思い知ったのです。「臨床医たるもの臨床研究をおろそかにしてはいけない。臨床研究は臨床医としての成長を助ける。」ってホンマやワ…。

花房 俊昭 先生
第 65 回日本心身医学会近畿地方会 H.P.より引用
花房先生の許可を頂いて掲載しております。

そして、神様は見ています。何年か経ってすっかり忘れたころに、また同じような患者さんがひょっこり現れるのです。「あの時、分からないままほったらかしにしないで、一生懸命調べておいて良かった！」と思えるその瞬間に、自身の臨床医としての成長を実感します。本当に嬉しい瞬間です。

私は、専攻医さん達に「臨床研究と日常診療は飛行機の両翼」と教えています。どちらが欠けても、大空には飛び立てません。どちらも大事。どちらも必要。でも専攻医さん達は、昔の私みたいに「は？？？」という顔をします。が、それで良いのです。そのうち分かる日が来ます。わかる日が来るということは、その専攻医さんが、それまでたゆまずに努力を続けた証拠でもあります。

主任部長、このひらかたの地で、これからも“臨床研究”と“日常診療”のどちらの翼も磨き続けられるよう、地道に努力を重ねていきたいと思います。

お写真は、授賞式に同期２人と。今も最前線で専門分野の治療に取り組む素晴らしい仲間です。雲の上の存在の２人から“おめでとう”と言って貰えて、主任部長、本当に嬉しかったです。

お二人の許可を得て掲載しております。